

「社記目録」(多賀社文庫733)



ツタエル・ツタワル ③

日記を使いこなすために…

《社記「目録」?》

写真は、多賀社文庫(シートNo.2参照)の「社記目録」という資料です。「社記」とは神社の日記のことで、ここでは多賀社の日記、現代でいう業務日誌にあたります。また、「目録」というと物品等のリストを思い浮かべる方も多いと思いますが、この資料は今でいう「目次」に近いものです。「目録」にし「目次」にし、一定の目的と規則のもとに対象の名前や内容項目を順番に並べたものです。この「社記目録」は、社記の内容を簡潔にまとめ、箇条書きにしています。

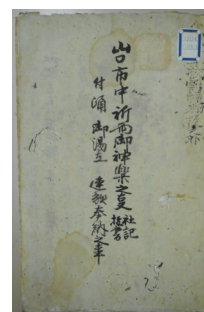
それにしてもなぜ、このようなものが作られたのでしょうか。これには、当時の業務運営の仕方や記録のあり方が関係していました。

社記などの日記には、当然ながら日ごとに業務内容や出来事が記されました。多賀社の場合、18世紀初めには社記に類するものがあつたようです。長年にわたり書き継がれたものは、その組織・人の業務情

報の集合体、データベースとなります。江戸時代までは、業務上の判断をおこなう際に先例を参考にすることが多く、日記はその際の典拠として重要なもののひとつでした。

とはいえ、日付順に記事が並んでいる日記は、いざ使うとなると難しいものです。年中行事ならば、各年のその行事がおこなわれる頃の日記を参照すれば、関連記事に辿り着くことができるでしょう。しかし、臨時の出来事、滅多にない出来事等については、時間が経てば経つほど、どこに書かれているかがわからなくなっていきます。

これでは「日記の持ち腐れ」になってしまいます。そこで、付箋で見出しを付けたり、色分けしたり、小口や表紙に見出しを書いたり、様々な工夫がされました。そのような工夫のひとつが「目録」なのです。実際、毛利家文庫54目次の中にも、これに類する目録が含まれています(シートNo.13参照)。日記の目録は、日記を持つ家や組織にあると便利な、日記の副産物でした。



「山口市祈雨御神楽事社記抜書」
(多賀社文庫36)

元禄14年(1701)以降の社記から、祈雨に関する記事を抜書してまとめたものです。

テーマ別に日記の記事をまとめ直すことは、古代からおこなわれており、「部類」といわれました。

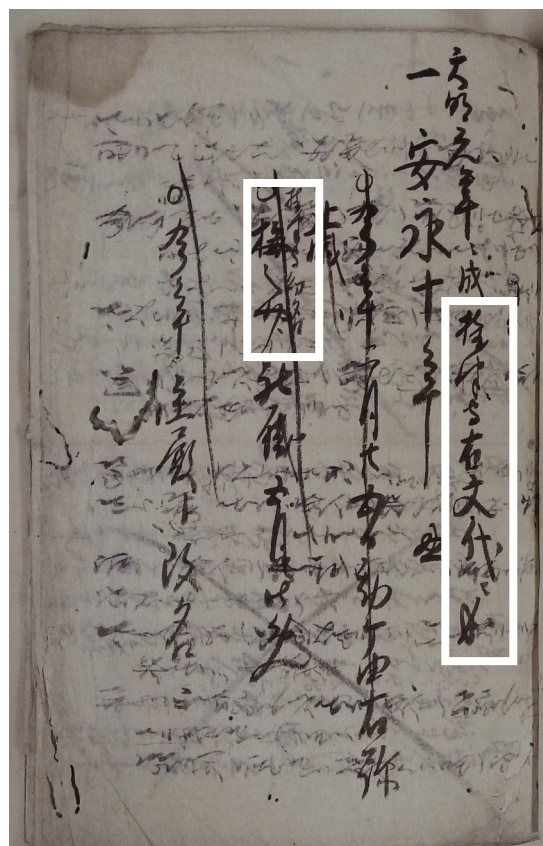
目録作成は、このようなものの準備作業としておこなわれることもありました。

《目録化したのは誰？》

日記を書いた本人が、自分で目録を作ることもあります。どこに何が書かれているかは書いた本人が一番わかっているはずですから、最も効率的な方法といえるでしょう。しかし、どこに何が書かれているかわかっているからこそ、書いた本人が目録を作る事例は、それほど多くはないようです。目録が必要だと感じるくらい長生きの人で、子孫・後輩のためにしっかりと記録を残そうという意識の強かった人となると、ごく限られることは察せられるのではないのでしょうか。多くは跡を継いだ人や、その日記を実務で使う人たちによって作られました。

多賀社の「社記目録」はどうかというと、どうやら子孫が作ったもののようです。

元となっている社記は天明元年(1841)から寛政5年(1793)までと、文化5年(1808)の、当時大宮司だった高橋摂津守有文(右文)の書いたものです。目録の1頁目(右写真)には、目録本文と同筆で「摂津守右文代二成」、「摂津守幼名」等、本人であれば書かない、書く必要のない類の注記があります。筆跡も他の有文自筆であることがはっきりしている資料とは異なりますので、後人の手によるものとみていいでしょう。



有文の幼名は「梅之介」だそうです。

《必要とされた情報は？》

目録本文はいたるところで大きく×印や取消線が書かれているだけでなく、ところどころ朱で「書入」などと書かれています。冊子に使われているのも何かの反古紙ですので、これは目録作成のある段階の草稿と考えられます。「社記目録」に立てられていた項目について、この段階での×の付き方(採否案)をまとめると表のようになります(○は採、×は否)。

▼ 表：「社記目録」項目一覧

年	採否	話題	年	採否	話題	年	採否	話題
天明1	×		寛政1	○	多賀社祭礼、連歌堂へ神幸	寛政2	○	長姫祈祷御免
	○	有文(梅之介)社職に		○	多賀社祭礼、重就御覧	寛政3	○	伊勢遷宮
	○	有文主殿と改名		○	多賀社祭礼、雨天還幸延引	○	相殿弁財天開帳	
天明2	-			×	重就病気のため祈祷銀5枚	○	治親祈祷御免	
天明3	-			×	神輿等修復のため上方往来御免	○	統心院祈祷御免	
天明4	○	治親初入国		×	長姫より神輿料寄附	○	次女出産	
	○	治親へ御目見得		○	重就逝去	○	治親江戸参府	
	○	神道裁許状		×	神輿再興につき上京	○	治親以下祈祷	
天明5	○	神道一日法会で衣冠着用		寛政2	○	花月楼熊五郎江戸行金子献上	○	治親死去
	○	上京・帰宅			○	長姫江戸行、湯田で湯治、参詣	○	斉房家督
天明6	-		○		宝蔵建立	寛政4	-	
天明7	○	五位昇叙につき上京	○		治親湯田で湯治、参詣	寛政5	-	
天明8	×	神事道具仕立てに上京	○		御鹿狩にて鉄砲による死者、祈祷	文化5	○	上・下宇野令へ風鎮札守差止
	×	大海にて観月?	○		随須院祈祷			

これをみると、代替わりや上京、祭礼に関する例外的な出来事、藩主関連の諸事等が項目として残されていることがわかります。この目録がいつ、誰によって作成されたのかはまだわかりません。この後、防長二国は天保の一揆から幕末へ激動の時代を迎え、多賀社の鎮座する山口の町も大きな変化を迎えます。先例にはない出来事の連続となったはずですが、はたして、この目録は役に立ったのでしょうか。もしかしたら「こんなはずじゃなかった」かもしれません。